

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- 多文化共生 この2年を振り返る そしてこれからの展望 1
- 「多文化共生の地域づくり」フィールドワーク 2~3
- 新理事紹介 3
- ネパール現地報告 4
- ラオス現地報告 5
- ラオス図書プログラム国内活動 6
- 「ラオスの子どもたちと未来」講師チャンタソンさん 6
- クラフト生産者紹介第2回 シヴィライ村モン族の女性たち(ラオス) 7
- 「南北 코리아 と日本のともだち展」 7
- インフォメーション/活動日誌 8
- 編集後記 8

地 地球の木が1991年に誕生してから30年あまり経ちましたが、この間に世界の姿は大きく変わりました。これまで継続的に関わってきたラオス・ネパール・カンボジアでも資本主義経済が生活の中に浸透し、人々は国が推し進める経済政策の影響をますます強く受けるようになりました。

私 たちが住む日本も同様で、この30年の間に経済の停滞と経済格差の広がりにより、貧困が深刻化し、十分な食事を摂ることができない子どもたちが増えました。子ども食堂・フードバンク・学習支援など、意思ある市民による様々な取り組みが生まれていますが、国の経済政策・社会保障政策はなかなか変わりません。

その日本の中で、外国籍の人々の人口が年々増えていきます。しかし、彼らを「安い労働力」としか見ない経済的論理が根強くあり、また、外国籍の人々への無関心や冷淡さから、彼らの教育や社会保障の問題は放置され、差別意識、差別的言動、暴力が発生しています。

こ れらの問題を考えていきたいと「多文化共生の地域づくり」準備会が2020年度に設置され、まずは外国から日本に移り住んだ人々(ネパール、フィリピン、中国)や、在日コリアンの方たちをゲストに招いてお話を聞き、日本に住ぶ中で感じている問題を理解することから始めました。

2021年度には次のステップへのチャレンジとして、川崎市幸区で地域に開かれた「居場所」を開設している「ワーカーズ・コレクティブ メロディー」と連携し、「対話カフェ〜みん

多文化共生

この2年を振り返る そしてこれからの展望



川崎朝鮮初級学校で校長先生から現状を聞く

なで話そう多文化共生〜」を3回シリーズで企画・開催しました。川崎市南部には在日コリアンの方たちが多く住んでおり、「ヘイトスピーチ」事件が実際に起きた地域であったことから、「対話カフェ」でもそれが大きなテーマとなりました。この話し合いで理解と関心が深まり、川崎での在日コリアンの人々の生活の様子や差別の問題をもっと知りたいという思いが生まれ、2022年度の「多文化共生フィールドワーク in かわさき」3回シリーズの実施に発展しました。

こ れらの活動を通じて学んだことは、「ヘイトスピーチ」は外国籍の人々の問題ではなく、日本人でも外国籍の人々でも共通に守られなければいけない「基本的人権」の問題であり、「ヘイトスピーチ」を「表現の自由の一種」として許してしまっている私たちの誤った理解と無関心の問題だということです。一方で、川崎市

南部においては、在日コリアンと地域の人々が対等な関係で一緒に住むことのできるコミュニティを、子どもたちへの教育も含め、長い年月をかけて実現してきた歴史を知ることができました。

今 後も、多文化共生をテーマとした「対話カフェ」を、地域の市民団体と連携して実施していきたいと思えます。また現在、県内のネパール人コミュニティの中で、子どもたちの語学教育の問題や女性たちの孤立の問題があることを知ったことから、その問題にどう関わっていけるか検討する予定です。(多文化共生の地域づくりチーム 山田 孝志)

現場を訪ねて考える……「共に生きる」ことができる道を

3回にわたる「対話カフェ」で話し合い、感じた疑問を解きたい、在日コリアンの人たちの思い、ヘイトの実態を少しでも知りたいという参加者の声がフィールドワークという形で実現されました。

「対話」する機会が圧倒的に少なくなっているコロナの時代であって、「対話カフェ」は新鮮でした。参加者からは、身近に住んでいる人たちのことを「知らなかった」「もっと知りたい」という感想が多くありました。そこで、対話カフェで紹介した川崎市内の3カ所を訪ね、話を聞く計画を立てました。近隣の住民と力を合わせ、粘り強く差別に立ち向かう人たちの話を聞いて、多文化共生の地域を作るには絶え間ない努力と政治への働きかけの両方が重要であることを学んだフィールドワークでした。

5/17 泥をかぶって痛みを知る

川崎市幸区戸手4丁目河川敷 川崎戸手教会 参加者9名

川崎駅から北に約1キロ、多摩川の河川敷に戸手4丁目はありました。1959年の伊勢湾台風後、そこに朝鮮の人たちが住み始めました。川が氾濫するたびに水浸しになる地区でしたが、住民たちが自然に助け合う人情味あふれた暮らしがありました。2007年に住人たちの立ち退きはほぼ済み、土手の上にマンションがそびえていました。草っ原となった景色を見ながら、一時は400世帯が暮らしていたという昔の光景を想像しました。

見学の後、川崎戸手教会で、孫裕久(ソン・ユウク)牧師のお話を聞きました。初代牧師の関田寛雄さんは、桜本教会から戸手に移って来て、河川敷にあるコミュニティーのことを知りました。その住人から家屋を購入し、戸手伝道所を開きますが、最初はよそ者扱いでした。しかし、台風で教会が浸水し、泥をかき出す中で、「先生も泥をかぶったね」と声をかけられるようになりました。苦労を共にすることで次第に仲間として見られるようになったということです。

孫さんは1991年に戸手教会の牧師となりました。生まれた時から権利がないと諦める住民が多い中、教会の先輩牧師たちは諦めず、共に様々な権利を勝ち取ってきたそうです。



ユーモアを交えてお話をする孫牧師

孫さんは土手下の人たちと土手上の人たちの交流を図る活動を多く担ってきました。高齢者サロン、ふれあいガーデンと称した畑づくり、キムチ作り講座など。立ち退きでバラバラになってからも、同窓会のように集まっているそうです。

参加者の感想

- 高齢者や二世・三世の方々が悲惨な時代をたくましく生きてきた事例が大変心に残りました。
- 土手の中の人と外の人が出会い、交流して初めて、在日コリアンの方たちが受けてきた差別や偏見、遅しさが解るのだと思った。

6/1 民族教育を通して自己肯定感を育てる

川崎市川崎区桜本 川崎朝鮮初級学校 参加者20名



朝鮮語を学ぶ1年生

姜珠淑(カン・ジユスク)校長先生の出迎えを受け、まずは1階の幼稚部の教室を訪問。2クラス18名の子どもたちが在籍しています。次に2階、3階の初級部へ。小学生は21名。教員は7名です。少人数のクラスがほとんどで、中には1、2名のクラスもあります。1年生の朝鮮語のクラスでは、ハングルの読み方を学んでいました。

校長先生から学校の歴史や現状について説明を聞きました。戦後、祖国に帰ることを念頭に、子ども達に言葉を教えるための国語講習所が始まりました。途中、強制閉鎖された時期もありましたが、桜本小学校分校として継続され、1965年に自主学校(各種学校)として認可されました。当初450名が在籍、1970年に現在の校舎が建設され、同年、日本に在住するための教育の方針を変えていきます。昨年11月に創立75周年を祝いました。

校長になって5年目の姜先生は、生徒の減少に歯止めをかけようと、父母の協力も得て、園児を増やしてきました。目標は1クラス5名。目指すのは、朝鮮語を通じた教育により子どもたちが自己肯定感を持てること。学校の特徴は地域密着型

です。生徒の多くが川崎区と幸区に住んでいて、近隣の住民との交流も盛んです。

現在、朝鮮学校への補助金は打ち切られ、高校無償化からも外されており、父母にとって朝鮮学校に子どもを通わせるという選択は厳しい状況です。しかし、同胞たちが苦勞して築いてきた伝統を引き継ぎ、入学したい子どもが一人でも二人でもいれば受け入れていきたいと校長先生の思いは前向きです。2年後の新校舎建設にむけて準備が始まっています。

参加者の感想

●日本語の授業もありつつ朝鮮語で学習と生活や指導が行われている様子がよくわかりました。日本の教科書とおなじような内容+朝鮮の地理歴史まで6年間で学んでいるという幅の広さに驚きました。

●これまで、正確に知る機会がなかった朝鮮学校という制度や川崎朝鮮初級学校の歴史を映像を混じえてご教授いただき、苦難の歴史に思いをはせて涙ぐみました。

6/20 多文化共生の町桜本でヘイトに向き合う

川崎市川崎区桜本 社会福祉法人青丘社 ふれあい館

参加者15名

ふれあい館館長の崔江以子(チェ・カンイジャ)さんは在日コリアン3世。桜本に住むようになった朝鮮の人たちの貧困の中での暮らし、多文化共生を町ぐるみで実践している地域の人たち、そして差別をなくしていくには法律が必要であることを、ご自身やご家族の辛い体験を交えて話してくださいました。

桜本は朝鮮半島から来た方が多く住んでいる地域です。京浜工業地帯の労働者として、差別と貧困の中、日本の復興に協力しました。ふれあい館は川崎市の条例により1988年に設置されました。その目的は、「基本的な人権尊重の精神に基づき、日本人と在日外国人(主として韓国・朝鮮人)の市民・児童が相互にふれあいを深め、互いの文化を理解し、差別を克服することにより、共に生きる地域社会を創造することに努める。」とあります。市民が声を上げたことで川崎市が動き、川崎市市民代表者会議を条例で設置した経緯があります。地域の小学校や町内会など、地域をあげて多文化、出自の違う人同士の交流ができています。

桜本はヘイトデモのターゲットにもなっています。崔さんや息子さんが公の場で人権侵害などを訴えたことに対して、身に危険が及ぶような脅威にも晒されています。2016年にヘイトスピーチ解消法が国会で成立し、2019年にはヘイトスピーチに刑事罰を科す全国初の条例が川崎市議会で成立しました。私たち参加者は、圧力に屈せずに主張して生きるお二人の強さに感動すると共に、その闘いは今も続いていることを胸に刻みました。「違いは豊かさであり、違いを認め合って生きる」。ここでの実践が各地に広がっていくことを願います。

参加者の感想

●ヘイトスピーチ解消法や川崎市の条例制定までに被害者と川崎市民の多大な尽力があったことを初めて知りました。多文化共生には教育・啓発が必要ですが、ヘイトクライムな



崔さん(ふれあい館の館長)から体験を聞く

どの阻止には法制化が必須であると感じました。

●故意に起こされている差別に対しては、差別の対象ではない者が、痛みを感じている人の声を聞き、力を持ち寄って抗い続け、差別認識の無い次世代を育む努力を続ける必要があると思います。差別の対象は在日コリアンだけでなく、誰もがなり得ます。誰もが自分ごとの問題です。私にできるアクションをしていきたいです。



チームの山田さん、丸谷さんと
対話カフェゲストの余泰順(ヨ・テスン)さん

(多文化共生の地域づくりチーム 丸谷 士都子 成瀬 悦子)



地球の木の新理事に ネパール出身の サブコタ・ドルラズさん

2010年4月に来日し、専門学校で日本語を2年間学習。現在民間企業に勤務しています。2017年NPO法人かながわネパール人コミュニティを設立し、会長となり、神奈川県に在住するネパール人を援助する活動を行いました。活動中、人と人との助け合い、理解し合う事がどれほど大切であるかを益々感じました。これから、今まで培ってきた力を地球の木で活かしながら、より多くの人々の役に立ちたいと思います。

前回の会報誌89号7ページの「対話カフェ～みんなで話そう！多文化共生」の記事内の、「ヘイト暴力のピラミッド」の図は、冨増四季「ヘイト暴力のピラミッドに照らした分析」(January 20, 2014)を基に作成したものです。出典が未記載であったことをお詫び申し上げます。

新支援地に新しい流れを

地球の木のパートナーNGO・SAGUN(サグン)事務局長のマハタさんから2021年度の活動報告書がきました。コロナ禍と地方選挙による行動規制のため、身動きできない期間もありましたが、SAGUNは、新しい支援地インドラサロワールに事務所を設置し、パートナーである自治体や学校関係者と精力的に話し合いを持っています。少数民族が意見をしっかりと伝えるように、高校生対象の作文研修、父母を活動に巻き込んでいくための保護者との集いなど、計画していた活動を着々と進めています。皆さまのご支援が、開発から置き去りにされた村々にどんな変化をもたらしているか、いくつかの事例をご紹介します。

ロシ農村自治体では…

2021年度は、ロシ地域で行ってきた「幸せ分かち合いムーブメント」終了の年。マンガルタル村の高校から最後の奨学生、8名の女子が卒業しました。15年間で110名の奨学生が「自分の未来は自分で選択する」という目標のとおり、様々な分野に旅だていきました。これで同地域における地球の木の支援は終わりますが、SAGUNは、「これからもアドバイスをするなどつながっていく」と地域の人々に約束しています。奨学生支援プログラムは、すでに自治体と地域の人々に引き継がれ、運営されています。

インドラサロワール農村自治体では…

さて、新しい支援地インドラサロワール農村自治体(IRM)でSAGUNが力を入れているのは、「質の高い教育」です。これまでの教育方法は、たとえば、知識のある先生が、生徒という器に知識を詰め込むだけで、生徒から学ぼうとはしない、一方的な「預金型教育」が一般的でした。SAGUNは、そこに批判的教育法を推進しようという流れを作っています。従来型の教育のあり方に一石を投じ、生徒が問題意識をもって社会に変革をもたらすような、主体的な市民に育ててくれることを意図しているのです。



IRM教育コーディネーター(右)から本を受け取る校長先生

そんな中、目指す「質の高い教育」にピッタリの2冊の本がネパール語で出版されました。『Diwaswapna(白昼夢)』*と『Ujyalotir(光に向かって)』**です。「すべての教師と親が一度は読まなくてはならない本。教師が変われば、教育制度が変わる」と賞賛されている書籍です。SAGUNは、IRMの全ての学校の校長先生に、この2種類の本を配布し、読書会を計画しています。IRMにどんな変化が起こるでしょうか。

* ガンジーの教えを受けたインドの教育者ジプダイの創作小説。

従来の教育に頼らない独自の教え方に挑戦した教師の話。

** 革新的な教育を実践したレグミ著の教育学習方法論。

保護者会を開催



地域で初めての「保護者の日」

SAGUNは、IRM事務所を拠点に継続的に学校を訪問。先生たちが抱えている問題について話し合い、共に新しいアイデアを探ります。

ほとんどの先生が、子どもの行動や感情面の問題について親が認識する必要があることに気づいていますが、対策は取られていません。先生方からの要請と学校の協力で「保護者の日」が設けられ、SAGUNは保護者、生徒、教師、社会の他の関係者に、心理教育の話をする機会を得ました。約200人が参加し、子どもたちの行動や感情の問題、それが日々の学校生活に与える影響について議論が交わされました。

これまでの慣習は、子どもの権利を侵害するものでした。間違いを犯した子どもは、先生や親から体罰を受け、多くの子どもたちが学校を去っていきました。最近、学校での体罰は禁止されていますが、一部の教師や親は、規律維持の名の下に、未だに体罰を科そうとします。このような教師と親の行動は、改善する必要があります。話し合いの結果、社会心理教育の研修を受けた教師が、体罰や子どもの権利について参加していない保護者にも伝えることになりました。今後、子どもの行動や感情面の問題が改善されることを期待します。

タマン族のお正月ロサールに参加

日本と同じ寅年のお正月を祝うセレモニーに招待されたSAGUNは、インドラサロワールの人々との関係を構築する絶好のチャンス!と参加しました。2,500人



平和を願いプージャを捧げる女性たちが参加した、この祭典は、「幸せ分かち合いムーブメント」を多くの人々に紹介する貴重な機会となりました。

(ネパールチーム 乳井 京子)

聞き取り調査
から

サワンナケート県でのプロジェクトを終え 村人たちの声を聴く

JVC(日本国際ボランティアセンター)はサワンナケート県での「自然資源の管理・利用支援プロジェクト」を2021年9月に終了しました。その、10村1400世帯を対象にした活動の評価報告が地球の木に届き、JVC現地駐在員の山室良平さんは「一定の成果を挙げる事ができた」と述べています。そしてそれは、終了前に行った村民への聞き取り調査からも窺われます。

今号ではこの、村の人たちの生の声のいくつかをお届けします。社会背景を把握するため、その人がどんな人生を送ってきたかも聞いており、興味深く、JVCならではの地道な活動を実感できるものでした。



カムケオさん(82歳男性 パシア村)

1940年生まれ。子どもの頃は林産物が主な生活の糧でした。森には大きな木がたくさんあり、大きなカメ、イグアナ、ウサギ、シカ、ゾウ、ネコ科の大型動物もいました。川ではウナギや大きな魚や珍しい魚を捕りました。1981年に結婚し、焼畑だけでなく水田耕作も始めました。1999年に村まで未舗装の道ができ、翌年には学校ができ、2001年にトラクター、2009年に化学肥料が村に入り始め、2013年には電気が来ました。

村が発展し人口が増えると、伐採も増えて森が減り、多くの陸棲動物がみられなくなりました。川の魚も同様です。製材の日雇いや、サソリやタケノコ、コオロギを捕って売り、現金収入を得てきました。

2019、2020年の大洪水では家を流されましたが、JVCと出会い、支援を受け本当に有難かったです。一緒に村を歩き、話し、馴染みになり、とても嬉しくて忘れられない経験です。

可能であれば昔のような暮らしに戻りたいです。お金がなくても食べ物にはそれ程困らなかったからです。今は社会の移り変わりが激しく、貧しい世帯はついていけません。子や孫には、将来のために**自然資源を守る**よう伝えていきたいと思っています。



ブンターさん(41歳男性 アラン村村長)

ローブウッドなどの大きな木が多く残っているドンブライの森を**コミュニティ林**としたことは、将来にわたって役に立つと思います。規則もしっかりしていて、委員会によってよく管理していけるでしょう。共有の森がコミュニティ林として登録され、区域や利用の実態が明確になったことで開発事業の関係者と交渉し易くなりました。これからは相手のなすがままにならないようにしたいと思います。



ウエンサマイさん(56歳女性 ナライコーク村)

2020年に4世帯でグループを作り**キノコ栽培**をしました。翌年は多くの人に関心を寄せ10世帯に増えました。技術自体は難しくなく、資材も簡単に手に入れることができます。家で食べる他に、キロ当たり1万2,000キープ(約110円)ほどで売っていて、副収入になっています。



ソンカムさん(49歳男性 ナライドン村副村長)

村境、村の地図はとても役に立っています。以前はサトウキビプランテーションの会社が村人個人の土地にサトウキビ畑を拡大しようとしてもめる事がありません。村境に村の土地を示す看板、宅地に地図の看板ができてからは勝手に会社が入ってくることはありません。

<山室さんから>

多くの村人から聞かれたのは、「これ程毎週のように村まで来て話し合いを重ね、村を歩き回ってGPSで地図を作ったり、いろんな研修をしたりする団体は他にない」との声でした。足繫く村に通い、村人に寄り添うことで変化を起こす事ができました。

*以上は、JVCラオスボランティアチーム発行のニュースレターに掲載された山室さんの報告記事から抜粋したものです。

ラオスチームの
つづき

写真提供: JVC

共に村を歩き村境を確認、地図を作成する村人とJVCスタッフ

▶お金がなくても食べていけるってすごい強み。ひるがえって日本の自分たちの暮らしの心もとないこと！▶JVCスタッフのラオスの村人たちに対する真摯な接し方に敬意を表します▶JVCの活動はすぐに結果が出ることばかりではないが、じわじわと村人たちの意識に変化が現れ、自分たちで歩き出そうとしているように思われる▶次の支援地セコン県での活動にも期待したい

(ラオスチーム 斎藤 和子)

翻訳シート貼付けボランティア活動が始まりました

2022年度、絵本の少ないラオスの子どもたちに「本と出会い自分の世界を広げよう」と地球の木ラオス図書プログラム活動が始まりました。国内活動として「日本の絵本にラオス語の翻訳を貼ってラオスの図書館に届けよう！」を行っています。7月からのボランティア活動の規模はそれぞれですが、7月末現在、のべ20名のボランティアの方々と5回作業をしました。

7月7日には、明治学院大学ボランティアセンターが主催する1 Day for Othersプログラムでラオス語貼付けボランティアを行いました。ボランティアが初めてだという学生さん7名の参加がありました。ラオス図書プログラムの概要、なぜ絵本を送るのか、ラオスの教育状況を説明した後、自分の名前をラオス語で書いてもらうワークショップを行いました。ラオスの学校では毎年進級試験があり、合格しないと次の学年に進めません。小学校一年生がラオス語を覚え、試験を受けて進級するのは大変だということをよく理解いただけたようです。絵本にまつわる思い出なども話しながら作業は進んでいきました。作業後のアンケートでは「ラオスの教育の現状を知ったことで、絵本の翻訳の貼付けにより一層力が入った」など、プログラムの内容をご理解いただけた様子も知ることができました。

今後は地域のグループや新しいボランティアの方にも参加いただき、貼付け作業が予定されています。絵本のできる小さな国際協力の輪が少しずつではありますが広がっていることを実感しています。皆さまのご協力をお待ちしております。



学んで楽しく貼付けボランティア@明治学院大学

■ラオス語シート貼付けボランティア

以下の日程で13:30～15:00に地球の木事務所で開催予定。
9月22日(木)、10月3日(月)、10月20日(木)、11月7日(月)、
11月24日(木)、12月5日(月)、12月22日(木)
※参加される際は、事前に事務局にお申込みください。

■寄付募集中の絵本

『ぐりとぐら』『モチモチの木』『かいじゅうたちのいるところ』『わたしのワンピース』『スーホの白い馬』

(ラオス図書チーム 藤木 富美子)

5/28 地球の木総会・記念講演会

ラオスの子どもたちと未来

講師：チャントソン・インタヴォンさん
(NPO法人 ラオスのこども 代表)

「いつも若いと思って全力で走っていましたが、来年はもう70歳でびっくり。これから出来るだけ長生きして活動を続けたいです」と、ラオス伝統のすてきな織物の上下をまとったチャントソンさんのお話がユーモラスに優しく始まりました。

快活にのびのびと過ごした子ども時代だったようです。自分から「フランス語の学校に行きたい」と親に頼み、小学校からフランス語で教育を受けました。最初は大変でしたが、将来はフランスに留学して医者になりたかったとのこと。ラオス語の習得には苦労された



ようですが、その頃ラオスにラオス語の読むものがなかったという話が印象的でした。フランス行きは惜しくも叶いませんでしたが、親の勧めなどもあり、日本の奨学金の試験に受かり、1974年来日しました。日本語だけ学ぶのでは面白くないと、文部大臣に専攻の

変更を願い出て、教育学を学ぶことができました。ご自分の強い意志と行動力、それが40年に渡る「ラオスのこども」の活動にもつながっているのでしょう。

ラオスは1975年社会主義の国になりましたが、当時の人口300万人のうち30万人位が難民として海外へ渡りました。チャントソンさんは、人々がラオス国内に残って何かできないかと思った時、ラオス語が定着することが大切だと考えました。その後、日本で出会った絵本と図書教育の大切さを母国にも広げたい、そして、子どもたちが自分たちの文化に誇りを持つことで難民を出さず、豊かな社会を築けるようにと1982年に日本で「特定非営利活動法人ラオスのこども」を設立しました。ラオス全土に学校図書室・地域文庫を340カ所設置し、ラオス語図書の出版も行い、図書を通じ子どもたちが主体的に人生を選択できるようにと支援を続けています。

「いろいろな専門家をラオスへ送りました」とおっしゃるように、日本の数々の絵本作家や、出版社の方々が惜しみなく協力をしているお話に、チャントソンさんの持つ、人を引き付ける人間的な魅力をととても感じました。

(会報作成チーム 沼田 由美子)

クラフト生産者紹介 その2 シヴィライ村モン族の女性たち(ラオス)

こんにちは。ラオス在住の安井清子です。

地球の木が取り組んでいる生活クラブ生協や福祉クラブ生協の共同購入では、たくさんの方にシヴィライ村のモン族の刺繍作品を手にとっていただいております。

シヴィライ村は、ラオスの首都ビエンチャンから、車で3時間ほど北上した、ヒンフープ郡にあるモン族の村です。この村の人たちの多くは、1960~70年代に起こったラオスの戦争に巻き込まれ、タイの難民キャンプに逃れ、暮らしていました。私は難民キャンプで彼らと知り合い、以来30年以上のつきあいとなります。

モン族の女性は、民族衣装を美しく作るために、刺繍を刺し続けてきました。民族衣装だけでなく、あぶいひもや死出の旅に着る死装束にも刺繍は欠かせないものだったので。シヴィライ村の女性たちは、難民キャンプで、刺繍の布を、ポーチ等に仕立てることを覚えました。1993年にラオスに帰還したあと、新しい土地での暮らしを支えるために、女性たちが農作業の傍らに作り始めたものが刺繍のハンディクラフトです。

お米が足りない時、母乳が出ずに粉ミルクを買わなくてはいけない時、病気になった時、学校へ通うのにお金が必要な時…女性たちは刺繍作品を、私に持ってくるようになりました。その刺繍を買って日本のみなさまにお届けすることで、



シヴィライ村のみなさんと安井清子さん

彼女たちを応援したいと思っています。「手抜きをせずに、一針一針、心をこめて作ってね」と、私はみんなに言っています。時間がかかっても、一針一針丁寧に作った刺繍には、何か通じるものがあるように思えるからです。女性たちが家族を支える力を持つということは、生きる自信にもつながっていくように思います。お母さんの横で、子どもたちも見よう見まねで刺繍を覚え、そして刺繍の腕も継承されています。子どもたちにも自立した人生を目指してほしいと願っています。

南北コリアと日本のともだち展

20年で培った大切な信頼関係

日本と韓国、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)、中国、在日コリアンの子どもたちが絵を通して出会い・交流する「南北コリアと日本のともだち展」(ともだち展)は、2020年に20周年を迎えました。新型コロナの感染拡大が続く状況の中ではありましたが2021年6月には20周年記念行事を実施することができました。

コロナ禍で国境を固く閉ざしている北朝鮮の小学校からもインターネット経由で30枚の絵が送られてきました。「ともだち展」を一緒に作り上げてきた仲間として、なんとか協力したいというその熱意は本当にありがたいものでした。長年協力してくれているピョンヤン市ルラ小学校の先生たちの温かいお祝いメッセージの他、10年前に絵画交流に参加し、今は金日成総合大学の学生になっているキム・チュンイルさんからは「ともだち展で会ったいるんな友達、夢を実現した友達にまた会って新しい夢を分かち合いたいです」と嬉しい感想も届きました。同じく、韓国、中国、日本からも、かつて絵を描いて交流した「卒業生」のメッセージが寄せられました。2年以上も往来は途絶えています、まさに絵を介して、この地域の子どもたちがつながっていることを実感できました。

今年、「ともだち展」は「ともだち展ぶらす」として新た



写真提供:ともだち展

に出発します。依然として海外渡航が難しい中で、ネット環境さえあれば、いつでもどこでも誰でも見ることが出来る「オンライン展示」(11月1日~12月10日)をおこない、期間中には「ともだち展の日2022」(11月26日)として、絵を描いた子どもたちや支援者、協力者などが集うイベントも予定しています。今回のテーマは「わたしのニュース」。会えないからこそ、お互いの様子や新しい出来事を絵で伝え合います。

「ともだち展」は、これまでの20年で培った信頼関係を大切に、これからも絵やメッセージのやり取りを通じて東アジアの子どもたちの心と心をつないでいきます。皆さんもどうぞ応援してください。

(ともだち展事務局長 筒井 由紀子)

地球の木カレンダー2023 「つなげよう 笑顔のバトン!!」



そこにある幸せな暮らしを映した毎月の写真は「人は誰でも笑顔になる力を備えている」という三井さんの言葉通り、写真を見る私たちに元気を与えてくれます。

- 写真: 三井 昌志さん
 - サイズ: [壁掛け] 32cm×38.5cm (使用時60cm×38.5cm)
[卓上] 15.5cm×17.8cm×7.5cm
 - 制作元: 日本国際ボランティアセンター (JVC)
 - 価格: [壁掛け] 1,600円(税込)、[卓上] 1,300円(税込)
- ※カレンダーの収益は、地球の木の国際協力活動に使われます。



ラオスプログラム報告会

なぜ今、私たちはラオスを支援するのか～ラオスの森と私たちのつながり～

- 日時** 10月2日(日) 14:00～16:00
- 場所** かながわ県民センター7F 709ミーティングルーム (横浜駅西口徒歩5分)
- ゲスト** 岩田 健一郎さん(特非)日本国際ボランティアセンター)
- 参加費** 500円(資料代を含む)
- 主催** (特非)地球の木
- 申込み** 地球の木事務局



SDGs よこはまCITY 秋～国際協力・多文化共生からのアプローチ～

- 日時** 11月5日(土) 10:00～18:00
 - 場所** ZOOMによるオンライン
 - 参加費** 無料
 - 主催** よこはま国際協力・国際交流プラットフォーム運営委員会
SDGsよこはまCITYプロジェクト
- 詳細、申込みはSDGsよこはまCITYの公式HP、または地球の木のHPをご参照ください



地球の木は以下のプログラムで参加します

- ネパール・マンガルタル村プログラム 終了報告会
- ラオス図書プログラム現地報告会
講師: 渡邊 淳子さん(特非)ラオスのこども)

かまくら国際フェスティバル2022

- 日時** 11月6日(日) 10:00～15:00
- 場所** 鎌倉高德院(鎌倉大仏)

東日本大震災・復興支援まつり2022

- 日時** 11月12日(土) 10:00～14:00
- 場所** 横浜臨港パーク

あーすフェスタかながわ2022

- 日時** 12月4日(日) 10:00～17:00 ※予定
- 場所** 象の鼻パーク及び神奈川県庁本庁舎大会議場

デポー展示会

- 11月17日(土) 東寺尾デポー
- 12月7日(水) つなしまデポー



活動日誌(6月～8月抜粋)

6月

- 1日 多文化共生フィールドワークinかわさき (川崎朝鮮初級学校)
- 11日 鎌倉女学院高校出前講座
- 18日 第1回定例理事会
- 20日 多文化共生フィールドワークinかわさき (ふれあい館)

7月

- 7日 ラオス図書貼付けボランティア (明治学院大学)
- 16日 町田市立真光寺中学校出前講座
- 23日 第2回定例理事会
- 29日 もったいない寄付ボランティアデー

8月

- 29日 多文化共生 対話カフェ・フィールドワーク 報告会(メロディーココ)
- ※ラオス図書貼付けボランティアは、上記の他、8回実施しました。



◆今年度の理事会は10名のうち5名が男性という男女の比率になりました。ボランティアでいろいろお手伝いして下さる方も男性が増え、女性が多かった以前の地球の木とは大きな違い。世の中の変化を感じます。(Y.N)



特定非営利活動法人
地球の木